神武東征における邪馬台国の研究

白崎　勝

神武東征における倭国連合を明らかにする

本論では、古代の人が各地に名付けた同種、同名の山の配置から、その意を読み解き神武兄弟が東征の前、北九州の倭国のクニグニと連合したことを明らかにする。

大和での建国は日向を出発した神武東征に始まると、記紀が記すので、魏志が記す邪馬台国との関係が見えず、多くの議論を生んできた。わずかに東征が宇沙（宇佐）に到る後、ただちに東に向かわず、「竺紫の岡田宮」に迂回したと記す箇所が、邪馬台国との連合を想起させるが推測の域を出ない。この関係を文献学や考古学で立証することは、もはや困難と思われる。

「たかとり山」と「○尾山」でアプローチ

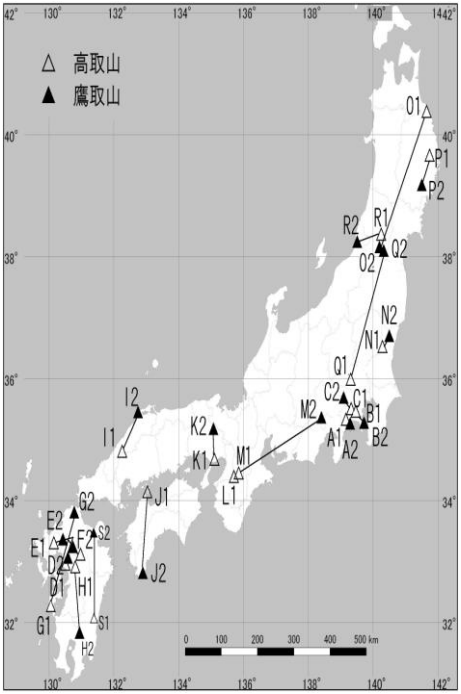
同名の「高取山」（数 19）・「鷹取山」（18）と、同種の「○尾山」（233）を取り上げアプローチした。○には異字が入る。

これまでの地名研究例としては、安本美典（＊1）の、邪馬台国比定地の一つ『夜須町付近の地名が奈良に移動している』とする研究がある。また井上赳夫（＊2）は、『神武東征・日本武東征の経路には高田などの「タカ」型地名が沿っている』とする研究がある。石井好（＊3）は、丸地名の拡散密度の勾配から、高天原は朝倉付近で、東征があったとする研究がある。三人の研究から、東征では地名の名付けが多くあったことが推測できる。

地名は風化を受けにくいとする評価もあるが、山名は別名や後人が名付けたとの伝承が多々あり、歴史研究に疑義も提起される。しかし一山では分からないことも同種・同名の山をグループとして検討することで、見えてくるものがあると考えた。

全国の高取山・鷹取山は東征のベクトルだった

神奈川県に集中する六山の配置や伝承から、東征隊が高取山から鷹取山方向に進んだベクトル（矢印）と考えた。全国の「たかとり山」の位置を図1に示す。



四国・中国・丹波の配置を見ても、高取山と鷹取山が対に見える。そこで、対と思われる山を結び符号を付けた。

この「たかとり山」も井上趄夫がいう、東征に沿った「タカ」型地名と考えた。「タカ」の一字を変えて進攻方向としている。奈良を境に西は神武東征、東は日本武東征の足跡である。ベクトルI・J・Kは瀬戸内海を進んだ東征隊が、中国・四国・丹波へ遠征したことを示す。これで東征に六年も要したとする、書紀記載の年数も納得できる。

また、二つの東征は同じ「たかとり山」を用いているので、一連の建国事業と認識していたことが分かる。山々を検証した結果は、書（＊4）で報告したので、ここでは詳細を省く。

神武隊は本隊と合流した

宇佐を経た後の「竺紫の岡田宮」迂回は、東征本隊との合流であったことが分かった。

九州の「たかとり山」の位置を拡大して図2に示す。6対のベクトルがあり、内3対で朝倉市に三角域Tを形成している。ベクトルFは反対に延びる点線のように、日向に延びていて、神武兄弟が高千穂宮で東征を相談した後、Tに向かった足跡と考える。倭国との連合のためである。ベクトルが短いのは、多用の混乱を避けるためか、倭国の領域を意識したものだろう。

ベクトルDとEは筑紫平野の人々が、Tに向かい集合したことを記録している。直方市の鷹取山に延びるベクトルGは、天草や島原の人々がT付近で合流した後、岡田宮方向に進んだ本隊を示している。この本隊のことが記紀に記されていないため、その後の議論を生んできた。東征の最中に亡くなった、長兄の五瀬命の隊だったため記載が無いのだろう。

ベクトルHは、東征を決めた神武が筑肥山地を越え、生まれ里の高千穂峰山麓に一旦戻った事を示している。東征の準備だろう。ベクトルSは、西都原の男狭穂塚古墳横にある高取山から宇佐神宮の南西にある鷹取山に延びていて、記紀が記す東征最初の行程である。西都原を出発したことが分かる。

古事記は東征出発について、「すなはち日向より發たして筑紫

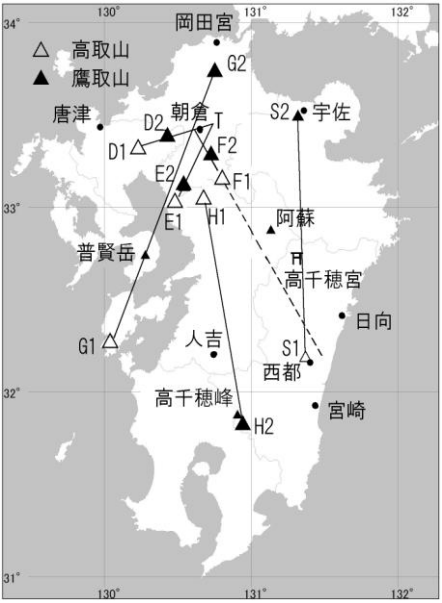


図2　九州のたかとり山

に幸行でましき。故、豊国の宇沙に到りましし時、・・・」と記していて、順次式に読めばまず筑紫に行ったことになる。迂回先の「竺紫の岡田宮」は、異なる「竺紫」を使用しているので岡田宮のことではない。筑紫をT方向に比定できる。

倭のクニグニは東征に参加した

倭のクニグニが東征に参加したことが記録されていた。図3では北九州の「たかとり山」分布に「○尾山」を追加した。「○尾山」の中でも「高お山」は特別に意識された山で全国に56と数が多い。

魏志に記す一支国の壱岐と末盧国比定地の唐津に「高尾山」が見つかる。伊都国比定地の糸島市は、同じ「タカ」型地名の「高祖山」があって、「世王在り」「一大率」がいたと記すように、特別な国であることが分かる。奴国・不弥国付近には大宰府市の「高雄山」がある。ここが「高雄山」となっているのは、経路の区切りのためである。これらのクニグニも大宰府付近で、本隊に合流したことが読み取れる。近くの米ノ山峠に笹尾山・竹の尾山を残して、合流後この峠を越えたことまで記録している。

その余のクニの参加は五島、武雄、鹿島に「○尾山」で記録している。「高尾山」でないのは、旁国としての区別であろう。

若松半島の岩尾山、舟尾山は遠賀川下流を指し示す。山名の頭をとった岩舟は上流にある船尾山とあいまって、東征の為の造船を記録している。船尾山の木の川出し地と思われる、遠賀川支流を訪ねると位登古墳があった。伊都国の人が采配したのであろう。

第一層の「たかとり山」が進攻方向を示し、二層の「高尾山」が一層を補助し、三層の「○尾山」が事跡などを記録している。

真実を知る人のみが、できた内容である。良く考えられた山名や配置は、用意周到な東征だったことが見えてくる。

以上の事柄は、魏志が記す250年ころの後、神武東征が行われたことも分かる。三角域Tは邪馬台国の都で、卑弥呼が住んだ所と考える。またベクトルDとEでもって、筑紫平野全体が、邪馬台国の領域と記録したのであろう。

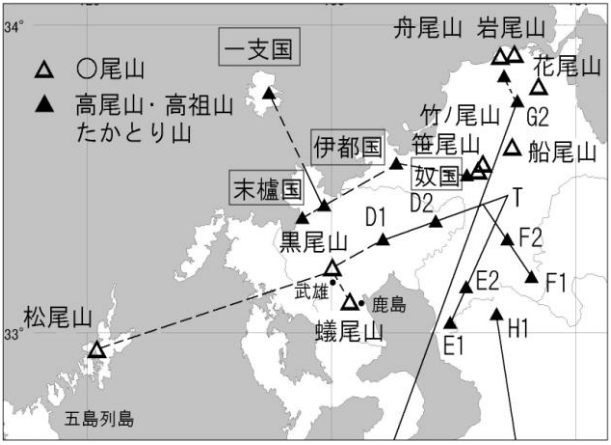


図3　北九州のたかとり山と○尾山

卑弥呼（天照大神）が住んだ都は高天原

高取山・高尾山などの「高」は、高天原の高と考える。また「取」は鷹や尾を用いていることから、東征が「高天原の使いの鳥」と認識していたことが分かる。特別な「高祖山」は高天原の祖・卑弥呼(天照大神)が、伊都国に生まれたことを残したのであろう。

図4は三角域Tを拡大した図である。約10 km前後の辺の三角域は、筑紫平野の奥まったところで、扇状地形にある。扇状地奥には、天照大神を祀る美奈宜神社がある。底辺部には多重環濠が残る平塚川添遺跡がある。三角域中央にある三奈木は、各頂点にある三つの「木」がつく地名の高木、甘木、杷木が「高甘杷＝高天原」と暗に示す地名と考える。

図４　現代地図での高天原

安本美典によれば、この付近の地名が同じ地形の奈良に移動している。*1記載の地名図を比較すると東征後、神武が都とした橿原はこの三角域に一致する。書紀では古語として「・・高天原に千木高く・・」と神武の橿原即位を記している。書紀編纂のころは、消えていたが古くは、橿原を高天原と認識していたことが分かる。東征は同じ地形に、高天原を移した遷都でもあった。

卑弥呼の宮殿跡はどこ?

神武は宮殿までも同じ場所に建てたとすると、橿原宮は天香久山の西2.7 kmにあるので、朝倉の同じ場所を探せば卑弥呼の宮殿跡があることになる。天香久山に相当する高山（香山）が杷木にあるが、その西は筑後川である。ところが高山の近くに、アマテラスのアとスを抜いた麻底良（マテラ）山がある。天照大神と父母兄弟が祀られていて、畏れ多く奈良には移せなかったのだろう。この麻底良山の西2.7 kmに須川集落がある。

集落を訪ねてみると、筑後川より30 mほど高い台地にあり、北と東は山に面し、南は竹やぶで保護された深い濠が多重に取り囲んでいた。筑紫平野を見渡せて宮殿の場所にふさわしい所であった。高祖山→麻底良山は卑弥呼が移ったベクトルかも知れない。これと別なベクトル H1→H2 との交点が須川になっている。

神武東征と倭国との連合は必然な行動

高天原から降った邇邇芸命から数代を経て、神武兄弟が生まれる。ようやく東征の時期を迎えて、高天原がある邪馬台国に出向き、倭国のクニグニと連合することは、必然な行動である。

図5は壱岐と唐津にある「高尾山」を結び、北と南に延長を試みた図である。北は対馬の峰町を経て、狗邪韓国比定地の金海に到る。南は人吉市の高尾山を経て、高千穂峰に到る。この直線は方位152度で、夏至の日の出の方位62度を東としたときの、真南に当たる。

記紀は出雲の「国譲り」や「葦原中国平定」など各地に人を派遣し、倭国の勢力拡大を記している。その中で高天原から「天孫降臨」した邇邇芸命が、高千穂峰で「此地は韓国に向ひ、・・・吉き地」と述べたと古事記に記している。邇邇芸命は、この高千穂峰から狗邪韓国に延びる直線を、知っていたのであろう。そしてその方角に「韓国岳」を名付けた。

図5　魏志が記す行程の方角

魏志は対馬国から一支国への渡海を、「また南に一海を渡る」とこの152度の方位を南と記した。そこで上陸後も、この基準で行程の方角を記録し続けたのだろう。このことが、その後の混乱を招いた。「東南伊都国」「東南至奴国」「東行不弥国」さらに、不弥国から「南至投馬国」の西都、「南至邪馬台国」の朝倉、「其南狗奴国」の菊池の全てが152度の方角基準で整合する。先のベクトルFはこの線上にある。

唐津市の呼子上陸から三角域Tまでの距離は、現在の道路地図で宇美町経由約134km である。沼や川の渡りの迂回を考え1.3倍して、要した日数30日で除すると一日あたり約6kmとなる。人数やその他状況が分からないだけに、極端に遅いとはいえない。

日程も帯方郡から呼子までの10日を除くと、投馬国の西都までの10日は一日あたり漕航が西回り約50km、東周り約40kmとなり、三度の渡海の約30～70kmと比較して妥当な日数といえる。

耳成山は彌彌による建国宣言

橿原の耳成山の命名は、彌彌が成した建国の高らかな宣言といえる。投馬国の官、彌彌および副官、彌彌那利すなわち神武兄

弟はまず邪馬台国の都、高天原に出向き連合し、後の大和となる大倭を結成した。神武は一旦、日向に戻り準備をして出発し、遠賀川流域で本隊と合流した。そして中国・四国・丹波の各地を隈なく言向けし、ついに奈良の橿原に建国した。

「たかとり山・○尾山」が示す東征の経路を図6に示す。

あとがき

東征による建国は、創られた神話ではなかった。記紀は東征の一部しか記していないが、山々が示す内容と一致している。

数代にわたる建国の準備や、潅漑稲作・鉄の文化を伝えた東征は、世界に類を見ない建国の過程と言える。山々の記録とともに誇れる遺産である。

〔引用文献〕

＊1　最新「邪馬台国論争」　安本美典、1997年

＊2　「日本古代文明の謎」　井上赳夫、1970年

＊3　忘れられた上代の都「伊都国日向の宮」　石井好、2002年

＊4　「たかとりが明かす日本建国」　白崎勝、2010年

〔参考〕

山々検証には、ネット地図、Ｍａｐｉｏｎ　キョリ測を推奨する。

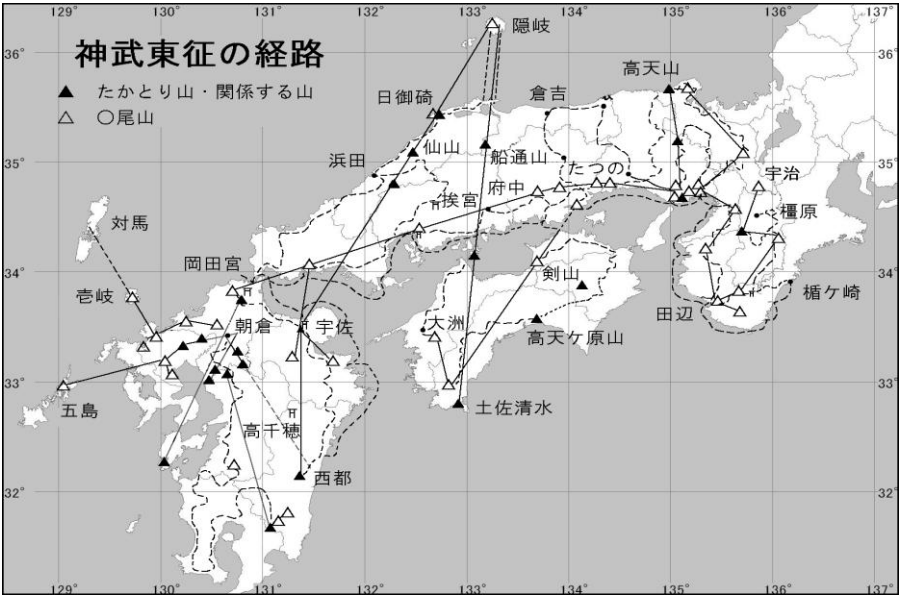


図6　たかとり山、○尾山が示す神武東征の経路